

福島潟周辺の中学生の環境認知の実態と経時的変化

1X22D095-9 横田 諒*

子どもは地域住民や学校教員などの様々な人を通して地域と関わる体験により、まちへの関心を育むとされ、まちづくりの参加意欲形成の一手法としてまちづくり学習が都市計画の分野で取り上げられている。新潟県新潟市北区にある福島潟では豊かな自然環境を活用した環境学習がおこなわれており、2019年には中学生の福島潟の地域認識を問うアンケート調査が実施された。そこで本研究では、中学生を対象として特に福島潟周辺地域の場所やその場での経験に関する認識の実態を把握し、アンケートを再度実施することで子どもの関心の変化の実態を把握した。その結果、中学生の場所の認知度やイベントの経験、動植物の知識などから、中学生が認識しやすい対象が確認され、施設や植物の一部に対しては経時的変化のない特徴的な認識があることが分かった。

Key Words : 福島潟, 中学生, まちづくり学習, 地域認識

1. 序論

(1) 研究の背景

人々が住むまちを認識するとき、その認識が地域に対する関心へと深化すると、まちづくりへの参加意欲の向上に関わるとされている。その意欲形成の手法として都市計画の分野ではまちづくり学習が取り上げられてきた¹⁾。

まちづくり学習とは、都市計画やまちづくりにおいて住民の参加意欲の形成を目的として用いられており、学校教育における地域学習の一環としても行われている。文部科学省の「総合的な学習の時間」の学習指導要領²⁾によれば、地域と連携した学習活動を行うことが求められており、地域は子どもたちが学び育むための重要な場所として位置付けられている。このようにまちづくり学習は地域や学校現場など様々な場で行われており、その方法も地域の広報誌や地域絵本作り、共有空間での共同作業や子供向けWSなど様々な方法がある。福田ら³⁾はまちづくり学習とは環境学習の1つであるとしており、環境学習まで広げてみれば日本各地で様々な取り組みを見ることができる。

その一例として新潟市ではラムサール条約の湿地自治体認証を受けており、潟と住民の関わりは深く市内の小中学校ではこれらの潟を活用した学習活動が行われている⁴⁾⁶⁾。新潟市北区の福島潟では環境学習ができる場として様々な施設が存在し活用されており、大森⁷⁾による中学校生徒を対象とした既存研究によって福島潟で行われる様々な体験の思い出

が印象的に残り、子どもの深い地域への認識を育てていることを明らかにした。2025年現在では、2019年以降に発生したコロナ禍で一時期中止されたイベントや、現在復活してきている環境学習などや様々なイベントや市民活動に変化がある。そのためこうした社会情勢の変化を踏まえて、地域認識や、まちづくり学習についての継続的な調査が今後のまちづくり学習を考えるうえで重要であると考えられる。

(2) 研究の目的

以上をふまえて、2019年に行われた大森⁷⁾による調査の継続として、新潟県新潟市北区の福島潟およびその周辺地域を対象として、学校教育の場ともなる福島潟周辺の施設やイベント、自然が影響を与える子どもたちの地域に対する認識についてどのように持つか把握し、中学生の認識の経時的変化を明らかにすることを目的とする。

(3) 既存研究の整理

既存研究として、a) 福島潟に関する研究、b) まちづくり学習に関する研究、c) 地域認識に関する研究、の3つに大別して示す。

a) 福島潟に関する研究

先行研究として、大森ら⁷⁾は、福島潟近郊の中学校に通う生徒に対して福島潟およびその周辺環境の認識についてアンケートおよびワークショップによる季節や時間を考慮した認識を把握するためのインタビュー調査を行った。その結果、身体感覚的経験が子どもの印象・思い出の形成に関わっており、地

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部4年

域認識の形成について間接的に関わってくることを明らかにした。一方で学校教育が生徒の地域理解に関わっているものの、生徒が目にした印象と役割について伝えたい狙いが異なると、その施設の役割の本質的な理解に至らないことを示唆している。

また、内山ら⁸⁾によって、福島潟の市民活動の役割と変遷について明らかにされている。

b) 子どものまちづくり学習に関する研究

まちづくり学習に関する研究は1980年代から都市計画の分野で研究がされ、建築学や環境教育学などで数多くの研究がなされている。原科ら⁹⁾は住民のまちづくりの知識獲得のためのまちづくり学習の必要性が述べた。梶島ら⁹⁾は、子どものまちづくり学習におけるその支援を目的とした副読本の有用性について明らかにした。田中ら¹⁰⁾は、ビオトープを通じた教師、住人、子どもの三者の活動によって、主体的に関わる意欲を育み、地域と学校の境界を無くすといった効果があると明らかにした。

c) 地域認識に関する研究

地域認識の調査手法は、数多く存在している。加藤ら¹¹⁾は、SD法によって地域イメージを調査し、地域イメージは活性度と整序度の二つの尺度によって認識されていることが判明した。芮¹²⁾は、異なる地域特性を持った3つの地域においてふるさとイメージをアンケート調査分析し、自然体験がふるさとイメージの形成に関与すると明らかにした。

(4) 本研究の位置づけ

本研究では、2019年に大森が行ったアンケート調査を基にして、福島潟とその周辺地域を対象とした中学生の地域認識の実態について、2019年と2025年での変化の把握を行う。まちづくり学習の結果であると考えられる子どもの地域認識の特徴を把握することによって、まちづくり学習に関する示唆を得ることが可能であると考えられる。

表-1 福島潟周辺施設¹⁴⁾

	施設名	概要
福島潟を取り囲む施設	ビュー福島潟	福島潟の情報発信施設
	環境と人間のふれあい館	公害・環境の学習施設
	遊水館	プール施設・木船体験
	潟来亭	古民家風無料休憩施設
	自然学習園	動植物の観察施設
	遊潟広場	動植物を観察できる池
	オニバス池	オニバスの群生池
	雁晴れ舎	野鳥観察ができる施設
	ラグーンブリュワリー	酒蔵とカフェ
	菱風荘	潟の近くの宿泊施設
治水施設	新井郷川排水機場	福島潟の水の排水施設
	福島潟放水路	氾濫時緊急放水施設
	福島潟湖岸堤	福島潟を囲む堤防

2. 研究対象地の概要

(1) 対象地の概要

福島潟は、新潟県新潟市北区および新発田市にかけて位置する淡水湖であり、その位置関係を図-1に示す。13本の河川が流入しており、そのうち12本は五頭山地を起源としている。一方で、福島潟からは主に新井郷川から海洋へと流出している。また、福島潟の面積は約262haであり、新潟県内に複数存在する「潟」の名を持つ湖沼の中で最大である。かつては国営福島潟干拓建設事業によりその面積は約193haの大きさまで減少したが、現在河川改修事業に伴って、湖岸堤の整備とともに一部が潟へと戻された。また、福島潟およびその周辺ではオオヒシクイをはじめとする約220種の野鳥と、オニバスなど450種以上の植物を確認できる。¹⁴⁾⁻¹⁶⁾

(2) 福島潟周辺施設の概要

福島潟周辺には、その自然環境を活用した多様な施設や、周辺知識を水害から守る施設が存在する。これらの施設の概要を表-1に示す。これらの施設では、福島潟の多様な自然を観察できるほか、ねっとわーく福島潟やヨシあし和紙の会などの市民活動団体の活動の場、近隣小中学校の環境学習の場として活用されている。¹⁷⁾

(3) 福島潟でのイベント

福島潟では一年間を通して、ビュー福島潟主催のイベントや市民活動団体によるイベント、新潟市主催のイベント等様々な団体によるイベントや企画展が行われている。これらのイベントについてその例を表-2に示す。

特に春の菜の花の開花時期や9月の自然文化祭などのイベントには多くの人を訪れる。



図-1 研究対象範囲¹⁶⁾

(4) アンケート調査協力校の概要

本研究では、調査協力対象校を大森による調査と同じ新潟市立葛塚中学校とした。葛塚中学校の学区内には福島潟の大半を含むほか、JR 白新線の豊栄駅や新潟市北区役所などの旧豊栄地区の中心的地域の多くを含んでいる¹⁶⁾。

葛塚中学校では毎年9月に福島潟周辺で開催される「福島潟自然文化祭」に学校行事として参加しており、今年度から総合的な学習の時間の成果として1年生が福島潟のPR動画や国の天然記念物であるオオヒシクイの飛来を歓迎する雁迎灯のデザイン、2年生が職場体験の紹介、3年生が演劇やウォークラリーなどの出し物を行った¹⁷⁾。また、同学区の葛塚東小学校においても総合的な学習の時間を含む学習の場においてザリガニ釣りや福島潟の自然を学ぶ活動等において福島潟が活用されている⁵⁾⁶⁾。

3. 子どもの福島潟に対する認知

(1) アンケート調査の概要

福島潟での子どもたちの普段の生活や学校教育などから子どもたちに育まれたであろう福島潟への施設、イベント、自然に関する認知や認識について、新潟市立葛塚中学校の全校生徒及び生徒の身近な大人を対象としてアンケート調査を行った。比較のために、アンケートは2019年実施のアンケートと同内容のものを組み作成した。アンケート調査の概要と内容を表-3、4に示す。

表-2 福島潟で行われたイベントの例¹⁴⁾

イベント名 (2025年においてアンケートの設問に追加したイベント名を青字で示す。)			
・ 菜の花の見頃	・ 潟船乗船体験	・ ザリガニ釣り	・ マコモ植え
・ 遊水館での水遊び	・ 昆虫観察	・ 雁ばり隊	・ ガイドウォーク
・ 福島潟駅伝/マラソン	・ クイクイのイベント	・ 潟キャンプ	・ ヨシあし和紙の会
・ バードウォッチング	・ ヨシ焼き	・ バードカーピング	・ かたごはんの会
・ 福島潟マルシェ	・ 夕方コンサート	・ 植物観察会	・ フォトコンテスト
・ 自然文化祭			

表-3 アンケートの基礎情報

	2019年	2025年
調査対象	葛塚中学校全校生徒 (345人)	葛塚中学校全校生徒 (354人)
配布方法	担任教諭の協力のもと、調査用紙を配布	
回収方法	調査用紙を担任が回収し、郵送	
配布日	2019/8/29	2025/11/10
回収日	2019/9/4	2025/12/4
回収数	267部 (回収率 77.4%)	168部 (回収率 47.5%)

表-4 アンケート調査の概要

設問番号	小設問	設問内容(青字部分については2025年に追加したアンケート項目)
Q1	Q1-1	福島潟に關わる10施設(2019は8施設)の認知について4段階で回答 対象施設: ビュー福島潟、環境と人間のふれあい館、遊水館、湯来亭、オニバス池、自然学習園、遊水館、雁鳴れ舎、波風荘、LAGOON 自然文化祭(2021年型)
	Q1-2	Q1-1について最大3つ選り回答 選択式: 来訪頻度、初来訪時の年齢、同行者 自由記述式: 施設説明、思い出や印象
	Q2-1	新井瀬川排水機場について回答 選択式回答: 認知、来訪頻度、役割の認知 自由記述式回答: 役割についての詳細説明
Q2	Q2-2	福島潟放水路について回答 選択式回答: 認知、来訪頻度、役割の認知 自由記述式回答: 役割についての詳細説明
	Q2-3	福島潟堤防について回答 選択式回答: 認知、来訪頻度、役割の認知 自由記述式回答: 役割についての詳細説明
Q3	Q3-1 Q3-2	福島潟でのイベントや活動の思い出 菜の花観察や自然文化祭などの計18項目 + 福島潟マルシェなどの追加4項目
Q4	-	地域で見つけた動植物と感想 動植物名・発見場所・感想について最大6個の自由記述式回答
Q5	-	生徒がほかの人に伝えたい思い 福島潟への思いに関する自由記述式回答
Q6&Q7	-	居住地と居住年数 葛塚中学校区内の地区15項目、居住年数の記述
Q8&Q9	Q8-1 Q8-5	保護者の福島潟へのイメージ 福島潟のイメージ、参加した活動、今と昔の変化、子どもたちへの福島潟に関する想いについて、最大2名に自由記述式回答

(2) アンケートの単純集計結果

2019年に大森が実施したアンケート結果および本研究における2025年のアンケート結果の単純集計結果を示す。

a) 福島潟周辺施設の認知度

Q1-1の福島潟周辺施設の認知度について4尺度による選択回答の結果を集計し、実施年度間で比較を行った。回答結果を図-2、図-3に示す。

アンケートの実施年度双方に共通して、「ビュー福島潟」と「遊水館」、「ふれあい館」は共通して認知の高い選択肢が選ばれ、「遊水館」の認知の低い選択肢の選択がみられた。また、2025年実施のアンケートにおいて追加した「ラグーンブリュワリー」と「菱風荘」の認知度も低いことが見られた。一方で、残りの施設においては、認知度に差が見られ、2025年において増加していることが見られる。

b) 福島潟周辺施設での経験

Q1-2では福島潟周辺施設から最大3施設を選択し、来訪頻度、来訪時期、来訪時の同伴者、その施設の知識と思い出を聞いた。この内選択回答の結果を集計し、比較を行った。集計結果を図-4~図-11に示す。

施設によって選択数が大きく異なり、認知度の高い「ビュー福島潟」「遊水館」では多くの回答数が得られた。一方で、回答数が少ない施設も多く、2025年実施のアンケートにおいて認知度の上昇が見られた「自然学習園」などの施設も回答数が少なかった。

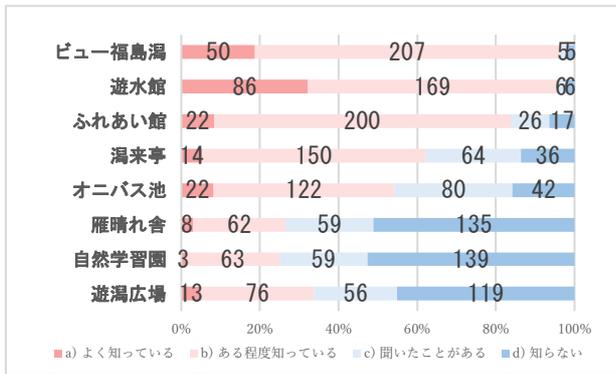


図-4 2019年の福島潟周辺施設の認知度

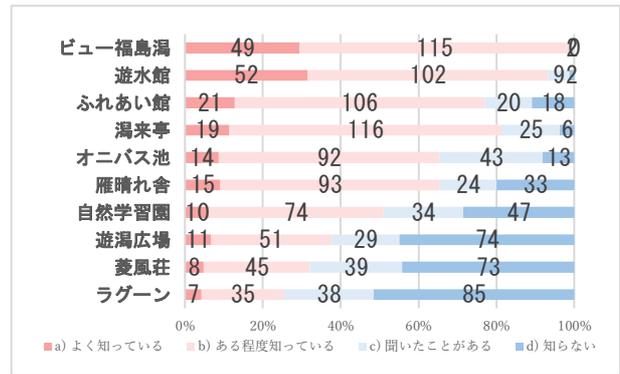


図-5 2025年の福島潟周辺施設の認知度

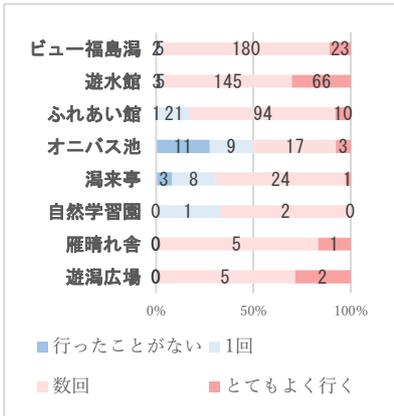


図-6 2019年 施設の来訪頻度

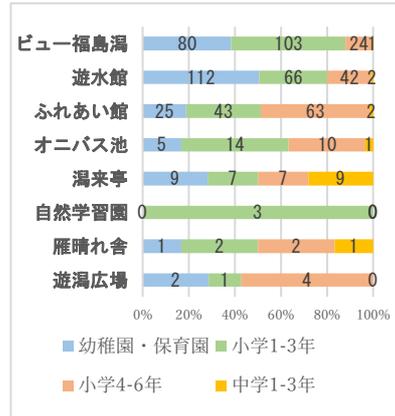


図-8 2019年 施設の来訪時期

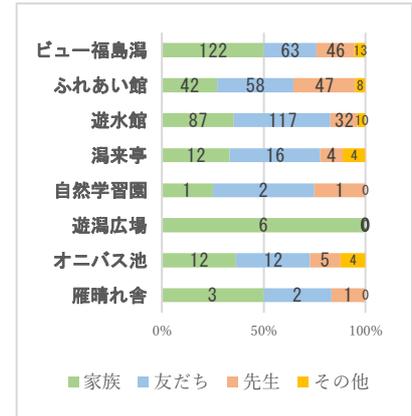


図-10 2019年 施設の同伴者

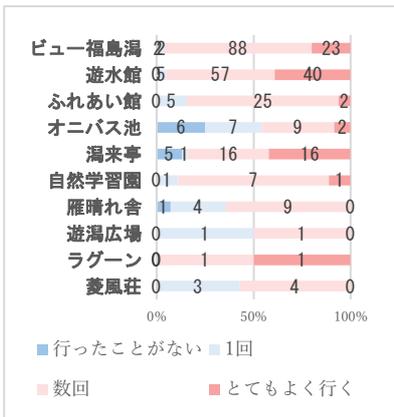


図-7 2025年 施設の来訪頻度

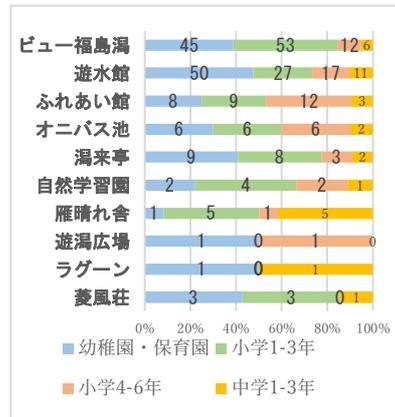


図-9 2025年 施設の来訪時期

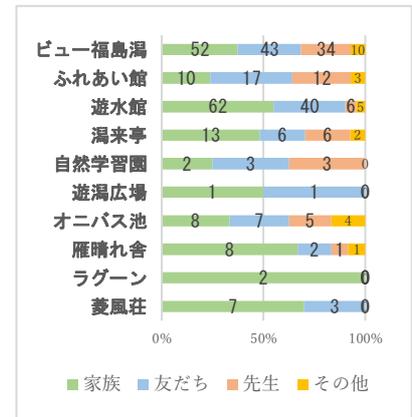


図-11 2025年 施設の同伴者

回答の傾向として、来訪頻度が数回あり、小学3年生までに家族や友達と訪れた施設の回答が多い。一方で、「オニバス池」は1回も訪れたことがないと回答する人が一定数あり、「ふれあい館」では小学4年生以降に訪れた人が多く、これらの施設では先生と訪れると回答した人が他施設より多かった。

c) 治水施設の認知

Q2では「新井郷川排水機場」「福島潟放水路」「福島潟湖岸堤」の治水3施設の認知について、施設自体の認知と役割の認知の2観点からその実態と変化を集計した。その結果3施設の認知では、「福島潟放水路」の施設自体の認知は学年によって高いことが見られた。また、役割の認知ではいずれも低く、「新

井郷川排水機場」では生活排水の浄水という誤認識の回答も見られた。一方で、放水路の施設見学をしたことがあるという回答が多かった2019年の3年生の施設や役割の認知が高かった。

d) イベントの参加経験と思い出

Q3では表-2に示したイベントの参加経験とその思い出について集計した。

参加経験があると回答された上位5つのイベントでは、実施年度によって変わらず多数の回答が見られ、思い出に関する記述回答数も多かった。2019年と2025年で共通して記述回答が得られたイベントを表-5に示す。

e) 動植物の知識

Q4 では福島潟およびその周辺で回答者が見つけた動植物の知識について集計を行った。

アンケート実施年度に依らず、約45種類の動植物の回答が得られるといった幅広い知識が得られた。特に回答が多かったものについては表-6 に示す。また、アンケートの回答の特徴として、2019 年では幅広い回答が多かったものの、2025 年では特定の種類の動植物の回答が目立った。

4. 自由記述回答による認識の分析

続いて、子どもたちの福島潟に対する認識についてより深く把握するために各設問の自由記述回答を大森による認識の4分類によるコーディングを参考に、生成的コーディングを行い、各設問項目に対する回答を整理した。生成されたコードを表-7 に示す。また、各設問項目に対するコードの分類結果について、総コード数に対する割合を表-8 に示す。なお、以下ではメインコードを【】、サブコードを《》として表記する。

(1) 福島潟周辺施設の知識と思い出

Q1-2 において、回答者に表-1 に示した福島潟を取り囲む10施設から最大3つ選択し、その施設の知識や思い出についての記述回答を得た。知識と思い出についてそれぞれ、生成的コーディングにより得られた特徴を記述する。

a) 施設に対する知識

施設に関する知識の回答は全体的な傾向として、その施設に関する状況といった【説明的】な認識と、その状況について回答者が抱いた【印象的】な認識が見られた。特徴的なものは【説明的】なもののうち、《過去の状況》や《現在の状況》に関する回答であった。

施設ごとにサブコードの内容に着目すると、施設「ふれあい館」や「潟来亭」、「遊水館」などで経時的変化のない特徴的なコードが見られた。

b) 施設に対する思い出

施設に関する思い出の回答では、その場で回答者が行った【経験的】な思い出が特徴的に得られ、次いでその時に抱いた【印象的】認識、そして、経験に付属するようにその施設や経験したときの状況に関する【説明的】認識が見られた。

施設ごとにサブコードの内容に着目すると、「ふれあい館」や「自然学習園」、「オニバス池」において、経時的変化の少ない特徴的なコードが見られた。

(2) イベントの思い出

Q3 において、回答者に表-2 に示したイベントから1つ選び、その思い出についての記述回答を得た。イベントに関する全体的な認識の特徴と表-5 に示した比較可能な7イベントの特徴を示す。

イベントの思い出に関する記述回答の全体的な傾向としては、イベントを体験しての【印象的】認識や、その時体験した【経験的】認識が特徴的に見られた。

各イベントの認識に着目すると、「菜の花の見頃に行く」のみ、《状況》を説明する認識という経時的変化が少ない特徴が見られた。

(3) 動植物の知識

Q4 において、福島潟周辺で見られた動植物の名前と発見時の感想の記述回答を得た。表-6 に示した動植物5つと全体的な認識の特徴を示す。

表-5 イベントの回答結果

上位	・ 自然文化祭	・ 菜の花の見頃に行く
	・ ザリガニ釣り	・ 遊水館の水遊び
	・ 潟船乗船体験	
	・ 福島潟マラソン	・ 潟キャンプ

表-6 動植物の回答結果

動物	植物
・ オオヒシクイ	・ オニバス
・ ザリガニ	・ 菜の花
・ 白鳥	

表-7 記述内容のコード整理結果

メイン	サブ	説明	例
経験的認識	現在	習慣的な行動	吹奏楽部で演奏をしに行く
	過去	過去の経験	校外学習で行った
	学習	学習の成果	水俣病について学んだ
	伝聞	他者から聞いたこと	鳥がぶつからないようにしているらしい
説明的認識	現在の状況	現在の状態	菜の花がある
	過去の状況	特定時点での状態	お土産も売っていた
	知識	対象の知識	葛塚中学校を作った人
	学習内容	名称・固有名詞 学習内容の説明	プール、遊水館 福島潟について分かる
印象的認識	好印象	好意的な気持ち	菜の花がきれいだった
	悪印象	悪印象な気持ち	小さい頃、魚が怖かった
	程度の把握	大きさなどの程度	大きな建物だと思った
	その他	上記3つ以外	おんせんがあったかい
課題的認識	課題	課題	記述無し
	願望	個人の願望	また行きたい
	提案	提案	お化け屋敷も絶対行くべき
	予想	他者への願望	福島潟にもっと来てほしい

表-8 記述回答の分類結果

設問	実施年度	回答数	コード数	【経験的】	【説明的】	【印象的】	【課題的】
施設知識	2019	615	782	2.6	73.5	23.7	0.3
	2025	316	435	1.6	78.2	20.0	0.2
施設思い出	2019	636	704	56.3	13.9	29.7	0.1
	2025	330	376	54.5	16.5	28.7	0.3
イベント	2019	223	324	39.2	12.0	45.7	3.1
	2025	146	249	39.8	13.7	45.8	0.8
動植物	2019	292	355	3.4	32.4	64.2	0.0
	2025	255	306	0.7	31.4	68.0	0.0

動植物を見つけた時の感想に関する認識の特徴としては、見つけた時の【印象的】認識と、その時の《状況》に関する【説明的】認識が見られた。

動植物ごとにサブコードの内容に着目すると、「オニバス」や「菜の花」については経時的変化の少ない特徴的なコードが見られた。一方で、動物に関する認識は、学年・実施年度によって特徴的に見られる認識が異なった。

5. 結論

(1) 本研究の成果と考察

本研究では、福島潟付近に住む中学生を対象として、福島潟に対して抱く認識の実態と経時的変化を捉えることを試みた。

結果として、中学生は施設に対してその場所の知識やその場での体験を主に認識していることや、ビュー福島潟をはじめとした自然学習に関わる施設の認知度が上昇していた。また、治水施設に対しては、その役割の認識には施設見学などの、施設を知ろうとする経験が必要であると考えられる。一方で、経時的変化に着目すると、認知や認識は施設によってその変化が見られ、施設ごとに中学生の認識に影響を与えていると考えられる。

イベントや動植物では、主にその時の印象を中心に認識されていることが特徴的に見られた。そして、中学生の認識に対して影響を与える特徴的なイベントや動植物が見られた。また、経時的変化に着目すると、イベントや動物の認識の多くは実施時期によるサブコードレベルでの認識の違いが見られた。そのため、中学生の認識への影響の与え方にはイベントや動植物に依らない影響があると考えられる。

中学生の認識は「施設」「イベント」「動植物」といった全体的な記述回答傾向は経時的に変わらないものの、具体的な施設名など細かく見れば、その認識に経時的変化が見られ、各施設、イベント、動植物の一部に特徴的に得られるコードが見られる。

(2) 今後の展望

中学生の認識は、施設、イベント、動植物などに影響を受けているが、その影響の受け方に経時的変化がある。特に、本研究において実施年度に共通した特徴がよく見られなかったイベントや動物は季節や時間により変わるものである。これらの影響を考慮して、さらなるアンケートや現地での調査活動によって、イベントや動植物が与える認識への影響についてその関係性を明らかにできると考えられる。

<参考文献>

- 1) 原科 幸彦, 広木 雅史, 小野 宏哉, 修復型まちづくり推進のための学習の場のあり方に関する研究, 都市計画論文集, 1988, 23 巻, p. 157-162.
- 2) 文部科学省, 中学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説 総合的な学習の時間編, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_012.pdf, (2025/07/24 最終閲覧).
- 3) 福田 由美子, 延藤 安弘, 横山 俊祐, 今井 邦人, 環境学習の場としての共用空間に関する研究, 都市計画論文集, 1990, 25 巻, p. 547-552.
- 4) 新潟市, 新潟市の学校一覧, https://www.city.niigata.lg.jp/kosodate/gakko/sho_chu_school/shisetsu/gakkoichiran.html, (2025/07/25 最終閲覧).
- 5) 新潟市葛塚東小学校, 子どもたちの様子, <https://blog.city-niigata.ed.jp/kuzusukahigashi-blog/>, (2025/07/25 最終閲覧).
- 6) 新潟市葛塚小学校, 葛塚小学校 いいね! ブログ, <https://blog.city-niigata.ed.jp/kuzusho/>, (2025/07/25 最終閲覧).
- 7) 大森匠悟・佐々木葉, 子どもが地域の湿地空間に対して持つ認識に関する研究—新潟県福島潟地域を対象として—, 土木計画学研究発表会・講演集, 第 60 回, p.1-7, 2019.
- 8) 内山瑛斗・桐原涼・佐々木葉, 地域水系基盤としての都市近郊湿地における活動実態と主体の認識—新潟県福島潟を対象として—, 土木計画学研究発表会・講演集, 第 64 回, p.1-9, 2021.
- 9) 梶島邦江・梅澤隆, こどものまちづくりの学習教材としての「まちの謎解きブック」の有用性に関する研究, 都市計画論文集, No.31, p.163-168, 1996.
- 10) 田中宏実, 延藤安弘, 協働の学びの場としての学校ビオトープに関する考察, 都市計画論文集, 2002, 37 巻, p. 451-456.
- 11) 加藤 哲男, 川上 洋司, 本多 義明, 地域イメージに関する認知構造の研究, 都市計画論文集, 1996, 31 巻, p. 337-342.
- 12) 芮 京祿, 児童期の自然体験とふるさとイメージとの関連, 都市計画論文集, 1995, 30 巻, p. 217-222.
- 13) 新潟市北区, “区 の 概 要”, 新潟市北区, <https://www.city.niigata.lg.jp/kita/about/gaiyo.html>, (2026/01/05 最終閲覧).
- 14) 水の駅「ビュー福島潟」, “水の公園 福島潟”, 水の駅「ビュー福島潟」, <https://viewfukushimagata.niigata.jp/fukushimagata-park/>, (2025/07/14 最終閲覧).
- 15) 新潟市・新潟市里潟研究ネットワーク会議, 福島潟ガイドブック, <https://www.niigata-satokata.com/wp-content/uploads/91eb04ce905f7522264e72e2e6145d62.pdf>, (2025/11/22 最終閲覧).
- 16) 新潟市北区, “葛塚東小学校/葛塚中学校”, https://www.city.niigata.lg.jp/kosodate/gakko/sho_chu_school/tsugakukuiki/sub02/01kita_ku/01kita_ku05.html, (2025/11/15 最終閲覧).
- 17) 葛塚中学校, “ICT 通信”, <https://www.instagram.com/kuzustagrams/>, (2025/11/15 最終閲覧).